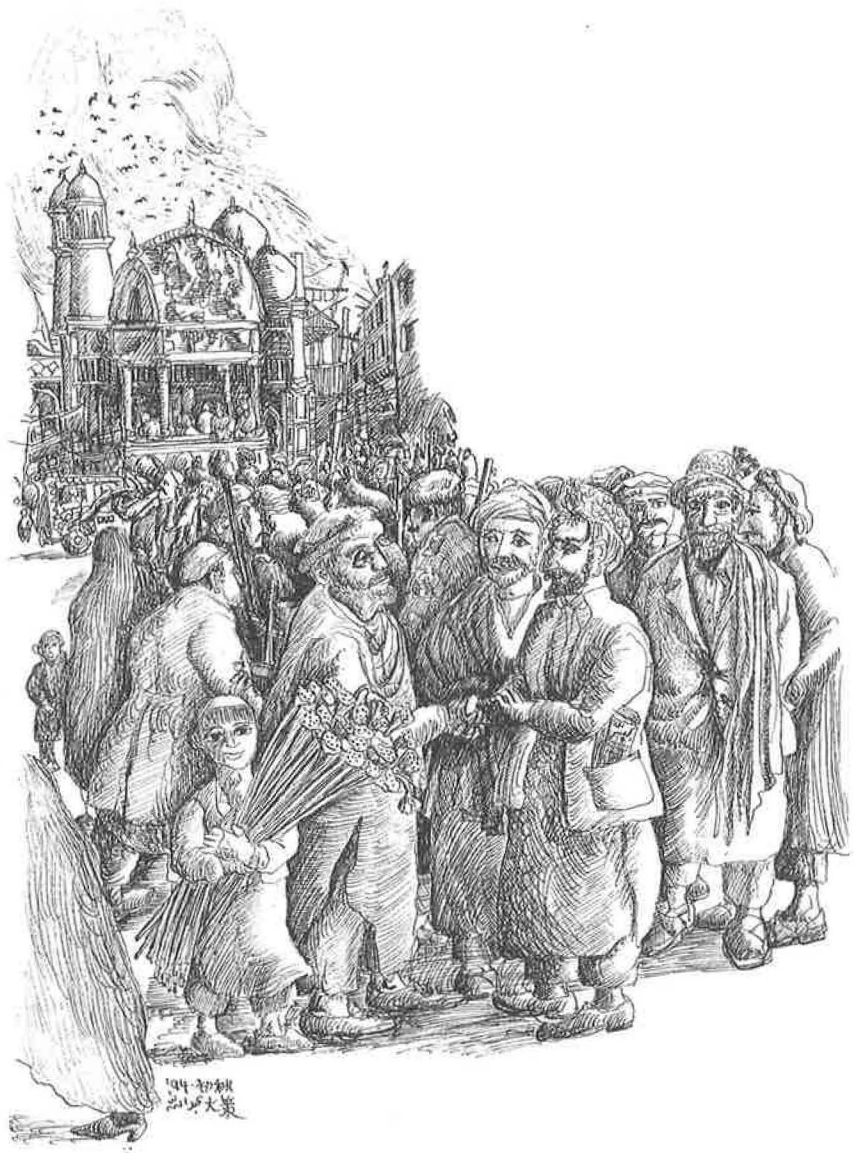


# ペシャワール会報

No.41

ペシャワール会 〒810 福岡市中央区大名  
一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号  
電話・FAX 〇九二(七三二)二三三七二



- 重大な岐路に立つペシャワール会.....高松勇雄
- ケララ村の惨劇——生きる者驕るなかれ.....中村哲
- 本当に大変なときは誰も助けてくれなかった.....モハメッド・ヤコブ
- 一年ぶりの日本に困惑.....豊崎朝美
- 主体になるのは患者さん.....倉松由子
- 信頼と対立のはざままで.....藤田千代子
- 大義名分の裏にある真実をみつめる.....恒松正敏

ペシャワール物語＊表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

# 重大な岐路に立つペシャワール会

## ●ペシャワール会会長に就任して

ペシャワール会会長 高松勇雄

去る七月十六日の総会で、私は岡田直幹先生の後をうけて、会長の任に当ることになりました。「どうなることか？」というのが今の私の実感であります。それは、私が今までペシャワール会やJAMSの活動について余り知識がなかったことや、少しあっても老齢のために忘れ易く、何度もし繰り返さなければという不安からだけでなく、今ペシャワール会とJAMSがやっている事業そのものが、誰にとっても初めての経験であり、先の見通しがつけ難い事業であることに由来するのではないかと思うのです。

私と中村哲君は一九七〇年代後半の数年間を、大牟田労災病院で一緒に勤務しました。ある期間は院長宿舎に同居していたこともあります。彼が初めてティリチ・ミール遠征隊（登山）に参加してパキスタンに渡ったのは、正にこの期間でした。みずばらしい恰好をして帰国した彼が、院長室に入ってくるなり、「どうです。（服装が）立派でしょう」と云い出した時、私にはそれが冗談としか思えず、パキスタンから印度を経て帰った彼が、本気でそう云っていると気付くには、しばらくの間が必要でした。

やがて彼は撮ってきたカラー 슬라이ドを写して、「これがアレキサンダー大王が通ったカイバル峠

です」とか「ヒンズークシユ山脈の最高峰、ティリチ・ミール」等々、院内でいくつものグループに話して廻りました。私は何度も彼の話をきくうちに、何か、彼のかの地との運命的出会いを予感したのを覚えています。それは、その後結婚した中村夫人も、新婚旅行にカイバル峠を訪れた時に予感したと云っておられたので、私の独断と偏見ではなかったと思います。こうして彼のかの地への思いは急速に強まり、再々の訪問と周到な準備の末に、ペシャワール会の発足、現地への赴任となったのは周知の通りであります。

私と家内は、ペシャワール会の発足以降、毎年総会に出席するのを楽しみにしていました。それは最初は、中村哲という若い（当時）医師というより、一人の若者の人柄に対する興味であり、今一つはパキスタン次いでアフガニスタンという異文化の国に対する興味でありましたが、総会後に行われる懇親会に出席するようになってからは、ペシャワール会事務局のメンバーの人達の人柄に惹かれたというのも正直な気持ちでした。ボランティアと呼ばれる活動は色々ですが、ここに集まる人の個性的でしかも爽やかな感じは、年老いた私にとって初めての新鮮な体験でした。年を重ねる度に、ペシャワール会は、中村哲ファ

ンクラブからJAMS運営主体へと成長変身していつており、活動の内容も予算規模も、それに応じて増大しています。十年という歳月を経て、それは正に事業と呼ばれる実体をもつように成長しており、それに応じた会則改正や募金活動の組織化も必要になってくると思われれます。だが私は中村哲ファンクラブを十年もの間支え続けたボランティア精神こそが、ペシャワール会の実体であったことを改めて噛みしめています。

最近の会報（四十号）に中村君が書いた文章、『援助とは何か。人間の福祉とは、「進歩発展」とは、「文明」とは、「平等」とは、「幸せ」とは、そして生きて死ぬとは……静かに、しかし深く、私たちの知るところがあるでしょう。現地の圧倒的な「光と影」は、これらを直に突きつけます。』を読んで、この十年間、私が中村君から学んできたものは、正に現地から発信される彼のこの気持ではなかったらうかという思いを深くしています。

現会則⑤には「会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う」と書いてあります。私に今可能な範囲の支援活動は、会長としての役割を果たすことであると認識し、創意工夫して自由なやり方で活動したいと考えています。

この会則自体も見直さなければならぬでしょうが、何よりも、前述の中村君の精神を原点に据えた援助活動が出来る人材と財源を、長期確保できる態勢を如何にして作り上げていくか、ペシャワール会は正に重大な岐路に立っているように思えてなりません。役員・事務局の方々ははじめ、会員の皆様方のご支援とご鞭撻を心からお願いする次第であります。（病院院長）

# ケララ村の惨劇

——生きる者驕るなかれ

## ●ヌーリスタンの溪谷(2)

JAMS顧問医師 中村 哲

### ◆一五〇〇名を殺戮

ダラエ・ヌール診療所から、ダラエ・ピーチーヌーリスタンのワマに向かうには、クナールの州都・チャガサライを通過する。「州都」と言っても、農家を除けば、ただか一千名前後の人口で、ひなびたバザールが約数十軒連なるだけである。最近内戦の痛手から少しづつ立ち直り、平和になってきた。戦乱の面影は一見うすれ、心地よいバザールの人混みの喧噪が広がっている。その外れに六〇坪ほどの大きな共同墓地が、高さ二メートル程の日干しレンガの、質素な塀に囲まれ、ひっそりとおかれている。しかし、これにまつわる恐ろしい過去の出来事が、見る人の気を重くする。私自身、やっと最近になって、このことについて触れる気持のゆとりが持てるようになった気がする。ここで述べても、死者に失礼にはなるまい。

この墓地はケララ村の一五〇〇名の犠牲者を地下に眠らせている。

内戦の初期、クナールは、共産政権に対して真っ先に反旗をひるがえした地域として、徹底的な攻撃を受けた。一九八〇年四月、州都チャガサライ

の北側に隣接するケララ村は、「ゲリラをかくまっている」とされてソ連政府軍に包囲された。当時この師団を指揮していたのはアフガン政府軍のタナイ將軍で、「匪賊討伐」と称してジャラバードを基地とする機械化部隊が進出していた。

同年五月、「匪賊討伐」で、ケララ村の虐殺が始まった。殺戮は二回に分けて行われた。

第一回が八〇〇名、第二回が七〇〇名、それぞれ広場に集められ、老若男女を問わず、無差別に銃弾が浴びせられた。村民の多くは確かに反政府ゲリラに同情的ではあった。しかし、自分の故郷を廃墟にしてまで戦う意志はなかった。殺戮と略奪は付近の村落にも及び、実に二千名以上の無抵抗の村人が数日で屠られたのである。人口の少ないアフガニスタンの村落で、いかなる惨事であったか想像に難くない。当然、生き残った者はいっせいにバキスタン側の国境地帯に退避した。この村人たちの退避先が、五年後の一九八六年、私たちが初めて訪れたバジヨウルの「ケララ・キャンブ」である。当時これら難民たちの、一種異様な、敵意と暗さを感じたのは、理由のないことではなかった訳である。

表紙をめぐる小さな物語 4

ペシャール物語

甲斐大策

太古、人間創造神ブルシャは、闇の宇宙、光の天空を翔び、時に大地近くを往った。そんな時ブルシャの手からは蓮弁が洩れ落ち、降るのだった。

一枚の蓮弁が、北の水と西の水と出会う所に舞い降りた。

優しい者も猛々しい者も、人々はこぞってその地に集い、都を建てた。

蓮華都ブシユカラブアテイ、またの名をブルシャブーラ。ヴェーダが謳い伝えたこの都は今日、北の水と西の水の流れの変化に沿って移りはしたが、ブルシャの手からこぼれた蓮弁の心を守っている。

人々はペシャールと呼び、土地の者はバハールという。ペシャールは、千の頭、千の首、千の胸、千の手をもち、自在に生きている。

「語り部の屋並み(キッサ・ハワニ)通りでかつて、友情と復讐、信頼と裏切り、愛と憎しみの物語り、そしてカラワン(キヤラヴァン)が伝えた遠い国の出来事を語った者達はどこへ去ったのか。」

ヨーロッパが「邪」に対する「正義」としてもたらしめた秩序が、今日も、ペシャールの表面の漣を収めようとする。

泥壁の蔭にチャール・バイを置き、灼熱の太陽を避けて静にまごろむ部族の大長老は、ブルシャの変身である。今日でもまだ多くのペシャールはそのことを識っている。口にしないだけである。そのうちキッサ・ハワニが復活し、大長老の前身と現在と将来を語る者が現れる筈と思っている。ペシャールは今も昔も、ブルシャそのものである。



破壊された政府軍の戦車

タナイ將軍は、「匪賊討伐の大戦果」をソ連軍に評価されて昇進したと云われる。だがクナールの住民は彼の名を長く忘れることはないだろう。彼らは政府軍に抵抗する「ゲリラ活動」を以てその復讐にかけたが、十年後の一九九〇年四月、味方であるはずの反政府党派に煮え湯を飲まされることになる。すなわち、政府軍のタナイ將軍と或る反政府イスラム党派の結託によるクーデター未遂事件である。権力奪取に手段を選ばぬ行為は、多数の住民を、決定的な政治党派不信に陥れた。アラブ系団体に押される軍事組織は、この無節操をなじり、クナールにおける党派抗争の一因とな

った(タナイ自身は、この事件後、ペシャワールに逃れ、その後イスラマバードで手厚い保護を受けて生活している。おそらく、彼がまともに外出することはできないだろう。生き残りの村民たちの手によって、いつかは制裁が行われるに違いない)。

### ◆血で血を洗う抗争

以上は、アフガニスタン全土で起きた、ごく一例にすぎない。内戦中は、数百・数千の「ケララ村」が存在した。しかし、ここで単に内戦の悲劇、特に被害者の惨状のみを語るのは事態を正確に伝えることにならない。伝える価値があるのは、むしろその後の地元アフガン人たちの反応である。活動地クナールで私が見聞きしたものは、当時の大部分の庶民(旧難民かつゲリラたる農民たち)に共通する出来事であったと思う。おそらく表面には決して知られることがなからう。

クナールとドラエ・ヌールが地元民の手に帰するまで、血で血を洗う抗争がくりひろげられた。復讐は伝統的な掟である。わが地元ゲリラたちも、旧ソ連II政府軍に対して、過酷な報復を行った。政府軍に協力する村落を襲撃し、一挙に数十名を殺戮した例も珍しくなかった。捕らえられた政府軍兵士は、彼らが行ったと同様に、鼻や耳をそがれ、恐怖の極限で処刑された。公衆の面前で、ナイフで生きながら捕虜の首をはねる光景も、普通に見られた。さらに、この「見せしめ処刑」は住民の恐怖心を倍加させ、暗い闘争心に油を注ぐ悪循環を作った。この私的制裁に比べれば、カプー

ルで行われた政治犯の逮捕や投獄・処刑は紳士的にすら思える。農村地帯の出来事は生易しいものではなかった。人間がいかに残酷たり得るかという実験場の観を呈した。そこには確固たる「死の力」が支配していた。彼らは——殺された者も殺した者も——地獄を見たのである。

### ◆地獄を知らぬ者の残虐

一方、ペシャワールで観察する限り、銃後に控えてあの光景を知らぬ者たちは、カブールが壊滅した後も、相変わらず「アフガニスタン」と天下国家を語った。超大国の干渉をなじり、「イスラム」を論じた。彼らにとって、カブールがアフガニスタンの全てであり、戦場の農村は舞台背景に過ぎないのであった。逃げてきたカブール避難民たちも、多くは自らの悲惨を語るに忙しく、彼らが支えた国軍による蛮行に思いを馳せる者はほとんど無かった。或る元軍人などは、避難民になってからでさえ、「任務」の終わった明るい解放感で、罪悪感のみじんも見られなかった。彼らの中央意識と共に、この気楽さが、暗い不平と同様、私にとって異様かつ不愉快であった。「亡国の憂い」も、どこか作作的な響きを拭いきれなかった。

この対極がドラエ・ヌールなどの農村であった。現地で見える限り、戦後、復讐にいきり立ち、銃をもつて闊歩していたのは、決して地元旧ゲリラたちではない。党派の傭兵か、戦時中難民キャンプで何も知らずに成長した若者たちである。強者と弱者が逆転したとき、弱者もまたそれ以上に残酷になり得る事実を彼らは知らない。おそらく、

政治権力をめぐって争う者も、カブールの略奪・暴行の主役も、本当に地獄を見た者たちによるものではなかった。

### ◆「死の力」に抗して

死の力に翻弄される人間の現実。それを網膜の奥にやきつけた者は、農村の情勢が安定したとき、敵も味方も沈黙していた。彼らは決してジハード（聖戦）を誇らしげには語らなかったし、アフガニスタンの将来について論ずることもなかった。反って、カブール避難民に同情を示すものが多かった。また意外にも、政府軍の下で働いていた村民がおそろおそろ戻っても、残酷な仕打ちはなかった。なるほど、これが二年前であれば、彼らは八つ裂きにされたことであろう。この逆説は、しかし、私には当然と思われる。

現地社会を知ると自認する外国人は、これを彼らの「したたかなアジア的血縁関係」、力関係の変化に対応する政治的マキャベリズム、「恩情的な部族主義」などと説明しようとする。確かに或る程度はそうであろう。だが、これもまた、部外者の評論である。事実はそのではない。ダラエ・ヌールの戦闘が終息した直後、まずは燃えうような敵意に続いて、一種の虚脱感が現地住民を支配した。それは空白感とも呼ぶうるもので、敵意のかたまりになった自分の存在感が失われたことによるものであった。希望をいくらでも持ち得た者は、廃屋を修理し、荒れ地を耕し、羊を追ひ、或いはJAMSの協力者となって、故郷再建の作業でこの空白感を克服した。やり場のない闘争心

は再建の情熱に昇華された。或いは、割り切れぬ罪業感を、巡礼の行で精算しようとした者もいた。

日々の糧を得るのに忙しかったからだけではなかった。それは、健全な生きる意志であり、希望という灯を介して、生命の意味を「死の力」に對置させたのであった。自己に内在する矛盾（彼ら自身の言葉を借りれば「彼らもまたアダムの子」）を、被造物としての低さ・謙虚さにおいて、確かにとらえていた。それこそが復讐という血なまぐさい掟を緩和したのである。宗教や民族を掲げるバカげた集団狂気は、おおむね人々を動かすことがなかった。ここに、信頼に足る人間の希望が潜んでいるように思える。

### ◆死者のまなざし

ケララ村の墓碑は、さりげないたずまいである。だが、平和を回復しつつあるバザールの賑わいと対照に、そこには死者の沈黙が冷然と生者の営みを眺め、両者を隔てる壁が蔽として存在する。人々は、その重さのゆえに口を閉ざして語らない。しかし、「アフガニスタン」に関わった全ての者——武器を与えて戦争をおとした者はもちろん、自覚なきアフガン人たち、人道的支援で喝采を受けた外国人、アフガニスタンを語ったジャーナリスト・評論家——死者を踏み台にして生きた者は、等しく、この「死者のまなざし」に戦慄すべきである。

私自身は既に部外者ではありえなかった。私もまた、死者のまなざしに脅える者のひとりである。少なくとも目前で展開されたこれらの事実を、

軽々と器用に総括することができなかった。しかし今、生者の破局的な営み、死の力の跳梁を全世界に見るとき、犠牲者になり代わって、「自覚なき生者の驕り」を伝えずにはおれない。同時に、内戦で逝った二〇〇万の魂を鎮める祈りは、人が根底で共有できる希望を分かちあうことで、真実となると信じうるからである。



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年バクスタンのペシャワール・ミッション病院に赴任。

らいのコントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共に一九八六年JAMS（ジャバナーアフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしつつ現在に至る。現在JAMSは一つの病院と四つの診療所を設置して、アフガン人の無料診療にあたっている。著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』（石風社）『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。



## 本当に大変なときは誰も助けてくれなかった

JAMS (日本—アフガン・医療サービス) マネージャー モハメッド・ヤコブ・サーフィー

—— 今回はわざわざ日本にきて頂きまして本当にありがとうございます。現地の事情がこちらにいるとよく分からないところがありますので、あるいは失礼なことを聞くかも知れませんがあらかじめお許し下さい。まず最初にJAMSへ参加されたいきさつを中村先生との出会いを含めてお話しいただけますか。

全力を尽してやってきた

ヤコブ まず最初にこういう機会を頂きましてペシヤワール会のみなさんと共に時間を過ごすことが出来たことに感謝したいと思います。私がどのようにしてJAMS (当初はALIS。88年からJAMS) で働くようになったかということですが、けれども、当時アフガンはソ連軍によって侵略を受け占領されていたために、ペシヤワールには難民がたくさん流れてきていました。私も難民としてペシヤワールにやってきて仕事を探していました。最初の二、三年はペシヤワールの「ウビガニ・ホスピタル」という、アフガンの女性患者のための病院でドライバーとして働いていました。その後しばらくして現在の私の妻のロクシヤナ(シヤ

ワリ医師の妹)と婚約したのですが、そのときシヤワリ先生が「JAMSに來ないか」と言ってお下さいます、それからJAMSで働くようになりました。

それで八六年からJAMSのドライバーとして働き始めたのですが、当時JAMSには五人しかスタッフがいませんでした。

それ以降、私は常に自分ができること、アフガンという国のためにできることを全力を尽くしてやってきたわけですが、JAMSのドライバーを始めて数カ月も経つと、アフガンの人々のためにたくさん仕事ができるようにと職種も変わりました。そのときはメディカル・トレーニング・コースといってJAMSの若いスタッフの育成のために二十人ほどの生徒がいたんですけれども、そこでマネージャーとしての職をもらいました。このコースは一年半か二年半ぐらい続いたと思うのですが、その生徒達が卒業するときには卒業証書もちゃんとJAMSから発行したりもしました。現在残っているのはシャルフェラーズとアフディという二人だけなんです、この二人は大変優秀で今もJAMSで働いています。

それから皆様もご存じだと思うのですが、いまでもパキスタンのアフガン難民は多くの問題を抱えています。とくに健康、保健の問題を抱えています。そこでアフガンの人々にはハンセン氏病だけではなくもつと他の病気でも援助の手が必要なんじゃないかという話になり、中村先生とシヤワリ先生と私の三人で五日だったが一週間だったか長い時間をかけて話し合いをしました。そのとき名前も今のJAMS (ジャパン—アフガン・メディカル・サービス) というふうに変えたのですが、これはもちろん百%日本からの援助で成り立っている病院で、それまでもずっと日本からの援助がきていたものから「日本」の名前も頭に付けてこの名前にしました。

—— 少し立ち入ったことになるかも知れませんが、ヤコブさんの一族は聖職者の一族だというふうに聞いておまして、ヤコブさん自身も二年か三年ほど前にメッカの方に行かれたとうかがっております。よろしければ一族のことや故郷のことについてお話しければと思います。

ヤコブ おっしゃったように私の一族はムラー(聖職者)の一族ですけれども、私の祖父はアフガンでは大変有名な人物でしてアフガン人なら九十九%の人が知っているのではないかと思います。名前はモハメッド・シヤリフと言うのですが、昔からはヤグルジャ・ナマと呼ばれていました。

私自身は二年ほど前にメッカに行ったのですが、けれども、これはイスラムの五つの法の中に「行けるのならメッカに行かなければならない。」というのがありまして、妻のロクシヤナと義母と一緒に



モハメッド・ヤコブ氏

に行くことができたので大変嬉しく思いました。メッカではもちろん母国のアフガニスタンのことも願いましたし、私達が困難な状況にあるときに助けてくださった日本人たちのためにも祈りを捧げてきました。現在アフガニスタンは完全に破壊されてしまっても持たない国なんです、いつかは平和な国になって欲しいと思っております。その時にもペシャワール会の皆さんが差し伸べて下さった助けを絶対忘れることはないと思います。新しい世代の人々もこのことは忘れないと思います。

いろんなNGOが来て援助してくれましたが、戦闘があつて本当に大変なときは誰も助けてくれませんでしたし、数年の間にみんな我々を見捨てて帰っていきました。しかしJAMSについてはそうではなかったと思います。新しいクリニクを開いたヌーリスタンという地域があるのですがヌーリスタンの人たちも日本人たちから受けた援助のことは忘れないだろうし、これから助け

てくれると信じていると思います。

—— 今ヌーリスタンの話ができましたけれども、おっしゃったように中村先生の話によりますと、ヨーロッパやアメリカのNGOはどうしても世界のスポットライトの当たるところに行きがちです。それに對してJAMSは今まで人が行かなかったところへ何十年という時間をかけて無医地区での診療のモデルを作ろうとしているわけですね。そのことについては私達ペシャワール会の会員も重要なことだと思っております、持続的にサポートしていこうと思っておりますが、もう少しヌーリスタン地域での今後の診療について、ヤコブさんのお考えを聞かせて頂ければと思います。中村先生もおっしゃっていますが、ヌーリスタンで診療所を開くにあたってはヤコブさんの力が大きかったということなので……。

### 他者の行かない所に行く

ヤコブ おっしゃったようにヌーリスタン地域の人たちは日本人がきてクリニクで医療活動をしていることをよく知っていますが、もちろん他のNGOもこの地域にきたことはあります。例えば国連、フランス、イギリスなどがそうですが、ほとんどが政治的な理由から来ていただけで多くのアフガン人はそのことを知っています。

我々JAMSは八八年に初めてドラエヌールに行つたんですが、その時その村人に、「我々の目的は病気を治すことだけで他には何も目的はないんだ」ということをはっきり説明しました。

ドラエヌールという地域は医者もなければ薬も

なく、NGOも来たことがなければアフガン政府も手をつけたことがないようなところでした。ここに住む人たちは本当に貧乏で、町へ出るのも難しいし瓶一本のシロップを買うことも、一錠の薬を買うこともできないような極貧の生活をしていました。誰も行こうとしないからこそこういった無医地区にクリニクを開こうということを中村先生とシャワリ先生と一緒に話をして、ドラエヌールに最初のクリニクが開かれることになったのです。

そのドラエヌールのクリニクでは毎月三千人ほどの患者さんを診察しています。その上流のドラエピーチという地域も医者や薬がまったくないところでした。ここには一つだけヨーロッパのNGOが来ていたのですが、成人病だけを診ていまして公衆衛生とかそういうことはまったくやっていませんでした。また山岳地帯のヌーリスタンという地域は都会から大変離れておりまして、薬を運ぶスタッフにも大変な負担がかかります。ですからそこにクリニクを開けば患者さんも来ることでできるようになるということで、そちらにもクリニクを開いたのです。他のNGOは大きな町にばかり病院を開いて我々のように田舎には診療所を開いたりしませんので、「どうしてそのようなことばかりするのか。」と思つたこともありましたが、やはり薬も医者もいないような無医村にこそそういう援助が必要なのだと信じています。

## ●ワーカー通信

\*

## 一年ぶりの日本に困惑

JAMS事務担当 豊崎朝美

ふてぶてしい私

約一年ぶりに日本へ帰って来て、街の中の過剰な程の色彩に、困惑に似たショックを受け、戸惑ってしまいました。六月の四七、八度の暑さが、七月に入って雨が降り出し三十度台になり少し涼しくなったペシャワールから日本へ戻ってきました。

今年の涼しかった夏を補うかのような暑さの中で商店街を歩けば、品物の種類、量の多さに驚き、圧倒され、各店からあふれ出ている商品やショーウィンドーの中の色鮮やかな品物の一つ一つに視線が奪われ、どこを見てもいいかわからず落ち着かない気持ちにさせられてしまいました。また、さらに洗練された銀行の自動両替機や駅構内の自動券売機の前に立って使用方法が解らず戸惑ったり、裾の

広がったパンツやジーンズ、靴底の高いサンダル等の六十年代ファッションを身につけ街を闊歩する女性に目を奪われたり、あるいは家の近所の田園風景だったところが、住宅群に変わっていたり、道路沿いの古い住宅が大型の玩具店になっていたり、その変化の早さに目を見張る思いでした。

そんな日本での生活は始めの十日程は何か落ち着かず、居心地が悪い思いをしましたけれど、やはり生まれ育った日本、すぐに品質の良さ、種類の多さ、何かと便利な生活器具、停電も無い、そんな便利で快適な生活に慣れてしまいました。日本での快適な生活に、何の疑問も感じることなく素直に受け入れてしまふ自分のふてぶてしさに、いつものことながら感心しました。

## 不思議な縁

約一カ月の日本での夏期休暇の後、福岡を出て成田で一泊し、次の日いつものようにシャルワルカミーズ（パキスタンで一般的に着られている民族服）に着替えると（実はシャルワルカミーズはウエストがゴム紐なので体を締め付けず、長時間座っている狭い飛行機

の座席では非常に快適なのです）、気分は半分ペシャワールになっています。話はちよつと横に逸れるけど、シャルワルカミーズを着て飛行機に乗っていると、よく日本人の方にあのー、あなた日本人ですか？と聞かれます。もちろん答えは「イエス」です。あるいは「現地の方と結婚されてるのですか？」とも聞かれます。答えは「ノー」です。

話はまたまたそれるけど、今回成田で一泊した次の日、ホテルから空港までのバスの中で、隣にたまたま座られた五十歳代くらいのご婦人から声を掛けられて、ペシャワールでらしい治療活動が続いている中村先生のもとで働いていると説明したら、そのご婦人の娘さんが結婚された時に、結婚資金の一部をパキスタンのらいたのために働いている日本人医師へ寄付したことがあると話をされ、別れ間際に何かに使って欲しいと寄付金を私に渡され、名前を聞く暇もなく、風のように去っていかれました。この偶然性に驚き、また感謝の気持ちで一杯になり、お礼を言うことも忘れ、ボーと立ち尽くしてしまいました。この誌面をかりてお礼を言わせて戴きます。

## エンスト

それでは話を元に戻します。夜八時頃イス





## 募集

ペシャワール発

### 「共に歩む」ワーカーを!!

JAMS とミッション・ホスピタルでは日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれの方々への便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

#### ① 募集対象：

1. 医療技術者（医師、看護婦（士）、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。

#### ② ワーカーは、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしていただきます。

#### ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを支給します。

#### ④ 目的を持った見学であれば拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）

詳しくは、ペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区大名1-10-25  
上村第2ビル307号 ペシャワール会  
電話 092-731-2372  
092-725-3440〔分室〕

ラマバードに着き、JAMSのドライバーとスタッフの出迎えを受けると、気分はほとんどペシャワールになっていました。車に乗り込み、三時間後にはペシャワールのミッション病院の宿舎に着き、ゆっくり体を休める予定でしたが、現実は全く違っていました。車で一時間程走ったところ、車の調子が急に悪くなり、道路の端に寄せたら、動かなくなりました。幸いガソリンスタンドが近くにありましたのでそこまで押して行き（私は女性なので車の中にいたままです）、何人か集まり色々やってみただけで修理できず、ペシャワールのシャワリ先生に連絡を取るようになりました。

しかし電話は近くになく、一人が電話のあ

る所までミニバスか何かで行くことになり、出掛けていったのが夜の十時三十分頃。ドライバーは何とかならないかとあちこち扱っていたけどそのうち諦め、ガソリンスタンドのすぐ横にあったチャイハナ（茶館）からお茶を取り（主要道路沿いのチャイハナは24時間営業なのです）、半分眠りながら、どうになるだろうと特別な不安も無く、側を通る車やトラックのヘッドライトや時折車の流れが途切れたときに訪れる漆黒の間を見るとき、自分はパキスタンに戻ってきたことをしっかりと実感しました。

それからどのくらい経ったのか、シャワリ先生が車二台で他のスタッフやドライバーを

引き連れて駆けつけてくれたのが、確か十二時半頃だったように思います。それからシャワリ先生の運転する車でペシャワールに戻り、ミッション病院の宿舎に着いたのは午前四時近くでした。日本ボケしていた私の感覚はこのどさくさで元の状態に戻ったようです。そう、一瞬後になにが起こるか全く予想がつかない世界感覚が。

### えう！ 関東地区協力者

現在、関東地区には三百人程の会員の方がいらしています。中村先生の報告会の連絡や打ち合せなど、協力できる方はご連絡下さい。

【連絡先】服部さん

横浜市保土ヶ谷区境本町55-21  
電話 045 (716) 0117

## 主体になるのは患者さん

ミッシヨン病院理学療法士 倉松由子

——二年目が終わってどうですか？

K まだフルコースの料理でいえばオーデブルのあたりの感じですね。

——それはどういう意味で……。

K まだメインの料理には至っていないという。まだ何もやってないですもんね。

——何もやってないというのは、何か目に見える形で残したいとか、仕事の中の達成感みたいなものを考えていらつしやったのですか。

K そういうことではなくて現場で何が起きているかというのが、まだ見えてないし、一年前に比べたらそれでも、わかってきたんですけれど。でも、本当はどうなんだろうと思うんです。スタッフや患者さんのしゃべっているのが半分しかわからないですし。

——言葉の問題が大きいですね。

K 言葉だけでなく習慣や背景なども良くはわかってないですしね。

例えば病院では、毎日のルーティンワーク

というのが決まっていますけど、それ以外に容体が急変した患者さんがいて、その患者さんをどうしようかなどとミーティングの時、スタッフが話している、それも全部はわからないんですよ。ただ、大変な人がいるというのがわからないんです。

スタッフは日本人に比べたら勤勉じゃないかもしれないけど、その日その日の状況に応じた対応をしようとしている。だけど私はそれがわからないんです。とりあえずルーティンのことはわかってるからそれはやりますけどね。

スタッフのことをもっとわかりたい

今、私がもう少しわかるようになりたいというのが、患者さんのことは、もちろんですけど、一緒に働いている、スタッフのこともなんです。

——具体的にどういうことですか？

K たとえば一緒に働いている時に、「こんなことも新しくやってみてはどうでしょうか」と言いたいんですけど、どういう風に言えばいいのかなあとか。

——この前、停電について書いていましたね。ああいうことでしょうか？（会報39号）

K そうですね。それと患者さんに対しては

その人の状況に即して言えばある程度言えると思うんですけど。

裕福なのか、貧乏なのか、頼る人はいるのか、それとも自分が一家の大黒柱なのかとか、ある程度聞いていけばアプローチの仕方というか、もがく余地があるんですよ。でもスタッフについてはどう近づいて話せばいいのかわか見えてないんです。

——ミッシヨン病院には理学療法士の人は何人いますか？

K 理学療法士としては私だけですが、レプロシートクニシャンとしては四人いて、皆リハビリの研修を受けているんです。

それで、カラチのマリーアデレード病院のファウ先生が来られたときなんか「こういう風にやりなさい」と言われたらそれは集中的にやるんですけどね。命令口調で上の人から「やれ」と言われたらやるんですけど、私たちの自主的な仕事としては、まだなっていないと思うんですよ。

最初に患者さんにあたったとき、ひととおりのことはするし、こうしなさいと言われたことはするんですけど後が続かないんです。一回だけで終わってしまう。

——それでいいと思ってしまうんでしょうか？



患者さんのリハビリをする現地スタッフ

K 四人いるレブロシーテクニシャンに対して、ベッド数は五十ぐらいですけど、患者さんはいれかわりたちかわりですし、外来の患者さんを含めると何百人となるわけですね。一人一人気をつけてというのが難しいんですね。

——その場その場をしのいでいくという感じですか？

K それはそれでしょうがない面もあるんですけどね。習ったことを全部やれというのは無理なんですけど。

入退院を繰り返す患者さんも多いのですが、継続的な視点から同じ患者さんを見ていくというのが少ないので、良い変化も悪い変化も見逃しているんですよ、大きなスパンでいくと。

患者さんが入院している間に、傷が悪化したとか、すごく良くなったというのがあれば継続的に見るという意味がわかってスタッフの励みになっていいと思うのですが。

#### 「リハビリ」は患者の自発性

——らいのリハビリというものが根気がいるものですね。

K まず薬を飲まなくちゃいけないですよ。リハビリというのはその先にあることなんです。その薬を飲むということ自体が難しいことだから。

私はたまたま自分の職種がリハビリの仕事なので、あえて向こうの常識に反してるかもしれないけどこだわっているんですけどね。

——いろんな要素があって、外国人であるとか病院内でのことであるとか他のスタッフたちとの関係であるとか、リハビリの意味という面もあるし、また、らいという病気自体が非常に根気のいる治療を要するということなど、いろんな条件が重なっているわけですね。

K リハビリが治療とは一概に言えないんじゃないかと思いますが。治療というより失ったものの代償という面があるし。できなかったことを他のやり方で覚えていくとかね、『治す』とは単純にいいないんです。

手術や治療というのは、患者さんは他動的に受けるものですよ。しかし、リハビリというのは患者さんが自発的に自分でやろうと思っただけでなければできないんですね。はたらかねはできるけど、実際に主体になるのは患者さんですよ。手術の主体は医者ですけど。だから、患者さんの意識が変わらないと、やりにくいものではあるんですけど。時間がかかるとか、根気がいるとか、そういうことは当たり前だと思っただけです。それよりも、リハビリの壁になっているものが日本ではわかるんですけど、まだ現地ではわからないんです。(つづく)

## 信頼と対立のはざま

ミッシヨン病院看護婦

藤田千代子

### 協力関係

今回の事のはじまりは、私達のらい病棟に入院中であつたハリマ（ペシヤワール会報に時々登場しているアフガン女性患者）が、いつものように少々ヒステリックに体の調子が悪い事を夜勤のスタッフに訴えた事にあつた。

たまたま、その時の夜勤者がレブロシテクニシヤンになる為のトレーニング中で、夏休みをもらい病棟でアルバイトをしていて、患者の状態（精神的な面）をまだわかっていない者だつた。夜十一時頃との事で、夜勤者は副院長で内科医であるミセス・ウジヤガー（夫は院長のウジヤガー医師）に、この患者の診察を依頼した。診察しながらハリマのカルテを見ていたドクターが突然怒り出した。理由は、そのカルテの中にJAMSや公営病院で行った血液検査の結果や入院記録があつ

たからである。

ミッシヨン病院らい病棟（中村医師）、JAMS（シヤワリ医師）、州政府の公営病院（ムラー氏）レブロシー・フィールド・オフィサー）の間には協力しあう決まり事のようにでもあるしそうでないようなものがいくつかある。（ここには文書にしくとも信頼関係が成り立つと、個人的に何とかしようと努力を惜しまないところがある。）

その協力関係とは、ミッシヨン病院のらい病棟ではできない検査が必要な場合や、アフガン人患者でダリー語しか話せず私達の病棟で入院生活が困難と思われる患者、退院後に治療薬の投与がパキスタン側で不可能な患者などはJAMSへ依頼する。

公営病院は、らい反応を起こしている重症例、ひどい足底潰瘍を持つ患者、手術の必要な患者等を送ってくる。私達の病棟からは、らい以外の病氣、例えば皮膚病のひどい患者、外科・産婦人科のうたがわしい患者は公営病院へ依頼する。

このような協力関係が、時にはいざこざがありながらも成り立っていきつつあつた。このような関係は中村先生が帰国されている間、病棟のスタッフにはたいへん心強いものであつた。

### 根深い対立

副院長がらい病棟へ怒りをぶちまけた。自分達の許可なしに何故こういう事をするのか、（ドクター中村の指示だとスタッフが言っても全く聞き入れない。）これからは自分の許可なしにJAMS、公営病院へ連れていってはならないという指示が下された。

その上、イスラム教徒を全く信頼していな



病院の中庭でお祈りをする患者さん

ここには私の知る範囲内でいくつかの対立がある。パキスタン人とアフガニスタン人、イスラム教徒とキリスト教徒、イスラム教徒の中でも宗派があり対立している。こういう対立の中のJAMS（アフガン人）とミッシェン病院（パキスタン人）。州政府のフィールドワーカー（イスラム教徒）とミッシェン病院（キリスト教徒）である。今回の副院長の怒りはこのような根深い対立と病院運営の財政的窮乏からの感情的なものだったように思う。

しかし、もっと大きな問題はミツシヨン病院側が「らい」について、本当の認識がないという点にあると思う。患者側の治療薬の管理、登録、変形予防、入退院、ワールドワ

ミッション病院当局は、私達が州政府のワイルッドワーカーと一緒に地方へ患者の家族検査へ行くことをころ良く思っていない。昨年十日間程度スワット地方へ行った時は、私の帰りを待ち、地方は危険だからという理由で注意を受け「私達の許可なしであなたは、何ひとつしてはならない」と禁止された。その時も丁度中村先生は帰国中だった。

ハリマの件もそうだが、「ドクター・中村の指示です」と言いかけても、今ドクターはここにはいないじゃないかと怒鳴る。

以後、長期で州政府のワールドワーカー達と地方へ行くときは休暇でラホールやカラチへ友人たちと旅行すると行つて出た。

前々からミッシェン病院の中で、らい病棟のスタッフは冷遇されてきたという。今回に限らず、私が来てから今までも、病院側はスタッフに驚くような指示をして強引に実行させたり、ルーチンのようにやっていた事に対して突然怒り出したことは多くあった。どれも中村先生の帰国中のことである。

スタッフがやや爆発した。今年四月から、

二人のレブプロシークニシヤンが、カラチの  
マリーアデレイド病院へ再トレニングに行  
つており、残つた二人のテクニシヤンが助手  
と共に、時には休みを返上したり、勤務時間  
外も病棟へ顔を出すなどして、びつくりする  
ぐらい頑張っている時だったのだ。患者の事  
を考え良かれと思つてやつていたことが病院  
側にわかつてもらえない、わかつてくれなく  
てもいいから口出ししないではいと言ふ。

ここで仕事をする事に喜びも悲しみもないという。病院側と彼らには長い歴史があり、同じような事が断続的にあったようである。

彼らの怒りと悲しみのようなものが少しは私にもわかるが、ありがたいことに、私にはまだ喜びも楽しみもある。しかしドロドロしたものが見えてきたり、それに関わったりすると疲れ果ててしまいそうになる。疲れ果ててしまいそうになりながら病棟にいると、何故私はここにいるんだろう、何故ここにいないければならないのだろうかという気になってくる。そして肝心の治療を受けている人達のことを忘れてしまいそうになるのである。

しかしスタッフ達には逃げ場がない。彼らはイスラム教国のキリスト教徒なのである。

中村哲著『ダラエ・ヌールへの道』を読んで

恒松正敏

## 大義名分の裏にある真実をみつめる

——この書は彼のための彼の人生におけるジハードの物語である

猛暑、酷暑という言葉がまさにぴったりの今夏だった。僕の生業であるところの絵の制作は遅々として進まず——我がアトリエにはクーラーなどない——お昼近くにもなると思考回路はオーバーヒート状態。ほとんど条件反射的に近くのコンビニへ罐ビールの買い出しに向かう。コンビニの脇を通ると、エアコンの室外機が四台程山積みになされてあり、そこからは巨大なファンがくり出す熱風がガンガンと路上に吹き出している。店内に入るとそこは別世界。肌寒い程の冷気である。

フト思う。これはいったい何だろう。どういふことだろう。自然から隔離された四角い箱の中だけ快適（本当にそうなのだろうか）な空間を設け、外は熱地獄。——核汚染、環境汚染が決定的に進んだ近未来のシエルトアの風景。

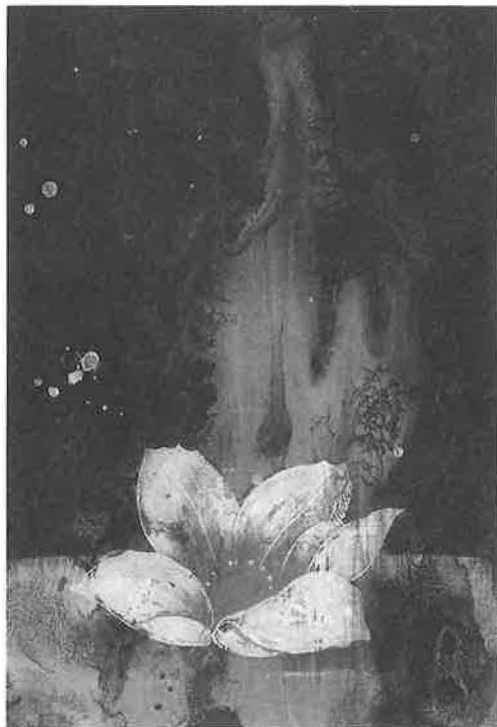
『ダラエ・ヌールへの道』を読んだ。内乱、難民、貧困、宗教対立、破壊うずまきパキスタンおよびアフガンの辺境の地で、ジュザーム——らい患者の治療を中心とする、ボランティアとしての医療活動。現地スタッフと共に十年にもわたる悪戦苦闘。もとより平和な日本に住む我々の日常からすると特異なことである。

著者の中村哲氏は安っぽい人道主義、観念的なヒューマニズムを徹底的に排除する。いつも大義名分の裏にある真実をみつめようとする。まわりに対しても、自分に対しても。「素直な良心の表現が知らずに感傷と自己陶醉に変ずる現実——であればこそ、『覚めていることだ』と自分に言い聞かせる。そして古風ともいえる真摯さで苦悩を下から理解しようとする。困難な状況が良い方向へ導くために細心の心配りをする。また時には「構わん続けよう。誰もが押し寄せる所なら我々がいく必要はない。誰も行かないから我々が行くのだ。」と大ナタをふるうことも決して忘れない。さながら「援助オリンピック」の観を呈する鳴物入りの諸外国NGOを横目で睨みながら、独自のやり方でことを進めて行く。

本著は痛烈な文明批判の姿勢を核に持っている。氏

が「自動販売機文化」と言い切る現代の日本の姿が照り返し、あぶり出されてくる。現代の日本においては、表面的には日常の上で死がほとんど忘れ去られているかのようにみえる。人々は死を深く考えようとせず、生に没頭する。それは生について深く考えようとしないことでもある。しかし日常の裏返しの中でうつつすらと、べつたりと死が張りついているのを無意識のうちに感じている筈だ。自殺に関するマニュアル書が若者を中心に売れ、脳死問題へのさまざまな議論。そしてエイズの蔓延。それでも死は病院や火葬場に閉じこめられ、とりあえず隠蔽される。繁栄の名のもとにあるささやかな物質的享楽。

文明的社会とは、欲望の解放をめざす世界である。きわまりない欲望を肯定し、満足させる手段をさまざまに工夫し考えることが文明の命題であ



水辺-ガラス絵8 (筆者作品)



## 報告に一喜一憂

山田美加 (横浜市)

前略

『アフガニスタンの診療所から』『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』と、感動のうちに、続け様に拝見させて頂きました。中村先生の書かれた文章は、読めば読むほど私の心を魅了してやみません。

人の心が失われてしまったかのようなこの日本に、これほどまでに根絶を訴え、行動してきた、JAMSと言う団体があったことに驚きを隠せません。

平和な日本では考えられない激戦の地であって、正に体をはって診療を続けてこられた中村先生の報告に、一喜一憂しながら文を目で追って行きました。

特に「人間に必要なものは、そう多くもなければ……。」と言う言葉には、「生活するに困らないだけのものがあればいいじゃないか。見栄も肩書もないよ。楽に生きれば良いのだよ。」と肩をたたかれたような気がします。

アフガニスタンの素朴な人々を照らし、らいで苦しむ人々の上に手を置き続けているJAMSの活動が、とても誇らしく思えます。

中村先生を始め現地の皆様にはお体を大切になさって下さい。神の導くままに良い働きをされることを祈っています。

そしてまた、ヒンズークシュの山懐より活動報告を楽しみにしています。

草々

り、宿命でもある。そしてそれは仏教という修羅の世界となる。う。(イスラム教ではどのようにうのか、浅学にして僕は知らない)。それは破滅へと到る道でもある。草木国土悉皆成仏——自然の万物を生きた生命とみる自然観。それは日本人が昔からいだいた生命観であつた筈だ。

氏は改めて文明社会と日本を問い直す。「そんなに西洋化してスマートになった日本——我々に足りないのは科学技術でも、気の利いた幸福論や海外協力論、ひねた個性の追求でもない。足りないのは、自然と人間についての地についた洞察であるような気がしてならない。」——文明人としての自分自身と、そして自分の中にある日本を含めて。しかしこうも記す「世界の動向はまさに、自然から離反する事によって適応してきた人間の

破局を実証しているように見える。」人間の生活は一步便利になつたら二度と後戻りできない。地球上の人類はすべて同じ方向に進む意志を持っているのだろうか。パキスタン、アフガンの地においても徐々にではあるが、結局そのように進んでいくのだろうか。

至極あたりまえのことだが、人は自分の目をもつてしかこのとりまく世界を眺めることはできない。どこの地においても生きていくための問題の根は同じである筈だ。『ダラエ・ヌールへの道』とはつまり、中村氏の心の故郷への道、あるいはその行脚の道程ともいえるだろう。この書は彼のための彼の人生におけるジハード(聖戦)の物語である。そして僕らも生きてゆかねばならない。

(画家・ミュージシャン 東京在住)

## 粹なはからい!?

豊崎朝美

こちらでは、物価高、頻繁にcoming不定期な停電(ペシャワールでは1日に3~4回、時には三十分、時には三、四時間)等に抗議する住民による道路封鎖、投石等の実力行使がパキスタン各地で頻発しています。新聞にこんなニュースがのっていました。

これからの時期、結婚式がおくなり、夕方から夜にかけての結婚式の時停電が来ると困るので、ある人が電力会社へその結婚式及び披露宴の時間にその地域を停電させないよう頼みにいくと、オフィサーから二十人分の食事(結婚式の時に出来る食事、普通味付けご飯と鳥肉、それに羊の肉の煮込み等)を職員のために用意するように言われた。どうせ三百人分の食事を用意するので二十人分増えてもたいした違いは無いし、と言うことで、二十人分の食事をもつて行ったら、停電は無く、結婚式は滞りなくすんだということです。

これは、オフィサーの粹な計らいととるべきなのでしょうか、それとも単なる賄賂なのでしょうか?

## ●事務局だより

\* 問田直幹先生がご高齢のため会長を退かれ、高松勇雄先生が新会長に就任されました。問田先生、長い間本当にありがとうございました。高松先生よろしくお願ひします。

\* ある日外国の新聞社のエージェントから私たちのプロジェクトについて問い合わせがありました。質問を受けて、はっと思ったことがあります。それは現地スタッフについて尋ねられた時のことです。私が「アフガン人スタッフは百人程です」と応えると、その女性は、「ああ、それでは、難民の雇用対策として家族を含めると千人ほどの生活が支えられているんですね」と言いました。

\* 私だけでも知れませんが、現地スタッフや患者さんのことはいつも意識にあるんですが、正直いってスタッフの家族のことまでは思い至りませんでした。\* 私たちのプロジェクトは現在、一つの病院と四つの診療所を運営し、昨年度は十六万人の患者を治療、予算も年間一億円近くになっています。財政の事を振り返ると、ゾツとするほどの綱渡りでしたが、もう引くに引けない剣ヶ峰です。私たちの善意や良心を越えた処で、現地プロジェクトが、継続すべき「事業」として定着しつつあることを肝に銘ぜねばと思っています。

## ダラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに—

中村哲 四六判上製三二六頁 定価二〇六〇円  
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通してニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセージ

## 石風社

福岡市中央区大名一丁目一十五  
電話 〇九二(七一四) 四八三八

\* マスコミというのは、まことに猫のようなものだと思ふことがあります。気まぐれだというのはネコが気を悪くするので言わずもがなですが、目先をチロチロ動くものには思わす手が出てしまふけれど、じつと動かぬものには何の関心も示さぬ性のことです。息をひそめて緊張の糸を張りつめながら一撃で獲物をしとめる豹の如きジャーナリズムは、やはり無いものなだりでしょうか。

## 〔◎村から〕

◆ 学生の私が◎村の村民となつてからはや一年半になります。今では皆様からきた会費等のパソコン入力までやらせてもらつてますが、切手貼りなどの単純作業も欠かさずやっています。単純作業といえども能率よくこなすにはそれなりのコツがあつて、やつと最近、体得できたような気がします。ところでこの度、仕事の都合で中国に飛ば、いや派遣されることになった村民K氏の家で一年間、「ヤモリ」をさせて頂くことになりました。「家賃は払わなくていいけん」という氏の甘い言葉によだれをたらして飛びついたフトコロも心も貧しい私ですが、一年間、立派に「ヤモリ」の大役を果たす所存であります。越したばかりでまだあまりかたづいていませんが皆さん、どうぞ遠慮なく(但し、雑巾持参で)遊びに来て下さい。

## ベシヤワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円

## 石風社

福岡市中央区大名一丁目一十五  
電話 〇九二(七一四) 四八三八

## アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価一一〇〇円

## 筑摩書房

東京都台東区蔵前二丁目一四  
電話 〇三(五六八七) 二六七〇

## 会 則

- ① 本会の名称をベシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE  
(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇  
二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二  
三七二) 内におく。